

福音書の冒頭の言葉である「初めに言（ことば）があつた」という書き出しは、そのすぐ後の3〜4節で「万物は言によって成つた。成つたもので、言によらずに成つたものは何一つなかった。言の内に命があつた。命は人間を照らす光であつた。」と、言が万物を形成する基となつたことと、その言の中に命があつて、その命が人間を照らす光であつたというのです。星一つ見えない暗闇で、どのように生きるべきか逡巡している人間を、言の中にある命が照らし行き先を指し示めしてくれることを壮嚴な言葉によって宣言しています。万物の「初め」が神のものであることを宣言することによって、この世の混乱と不条理の中に生きなければならぬ私たちに慰めを与える言葉となっています。

旧約聖書の創世記によれば、神は「光あれ」と言われて、言によって一切を創造されました。すなわち、神の「言」は神の意志の表現であり、一切の被造物の根底には、それを根拠づける神の恵みの意志があることが示されているのです。それゆえに、何人も被造物に対してその存在の根拠を否定したり無視したりできないということなのです。それにもかかわらず、例えば国会議員が同性婚を非生産的だと非難したりすることが実際に起こってしまうところに日本の政治の貧しさがあるのです。

万物が神の言によって創造されたということについて考えてみましょう。私たちの日常的な常識で言えば、神の言によって世界が創造されたという考え方は受け入れがたいものです。私たちの自然科学の常識で言えば、言葉はこの世界のいろいろな自然現象を言葉によって説明するものだからです。つまり、この被造世界を客観的に説明するために言葉が必要なものであつて、言葉が世界を創造するという言い方は、なじみにくいものなのです。

ところが、「言葉が世界をつくる」ということを実際に考えてみると、まんざら見当違いのことでもないのです。私たち人間は言葉を使って何かを表現したり、何かを伝達していますが、この言葉がなければ世界を表現したり、伝達することができないという意味では、言葉が世界をつくつていけると言うことが可能なのです。

けれども、世界がまず存在していて、それが言葉で現されているのではないのです。実際に世界を認識していく方法は、言葉が先にあつて、その言葉が指し示すようなかたちで表されている世界を私たちは経験していると言えるのです。これは、ちよつと常識をひっくり返すような考え方ですが、このことは、たとえば、私たちが直接見たことのない世界（たとえば死後の世界）について語りあうことができるという事実のなかによくあらわれています。死後の世界について考えるとき、見たこともない死後の世界について、私たちはすべてではないにしても、何かを語ることができています。ですから、世界が言葉で表現されているというよりも、言葉が世界を構成しているというのが現実と言葉の関係性なのです。

直接目に行っている世界をある言葉で語るといふことは、別の言葉で語られないという選択がなされたことを意味します。このとき、世界は別の言葉ではなく、ある言葉が指し示したようなものとして、私たちの前に立ち現われているのです。つまり、言葉が世界をつくつていっているのです。

たとえば、「末期がんの告知を患者さんにしたと仮定してみます」。末期がんの告知によって患者さんの生きる世界は一変します。告知しなければ、患者さんはそれまでの日常生活の世界を生きています。言葉が患者さんの経験する世界のありようを決定してしまうのです。たしかに、「さまざまな医学的検査によって確認された病理の存在や病状の進行という客観的な事実が先にある」と反論されてしまうかもしれませんが、しかし、客観的事実がないのに、医師が他人の検査結果を間違って別の人に告知をした場合でも、告知された患者さんの生きている世界は一変してしまいます。

このように、言葉は人間の人生を大きく方向づけるような力を持っているだけでなく、人間の認識を方向づける力を持っているのです。たとえば、かつて「同性愛」は一つの精神疾患とみなされてきました。かつては「病名」でしたが、現在では人間のひとつの「嗜好」あるいは「生き方」とみなされています。同じ客観的状況が言葉によって病気になるったり、病気でなくなったりするのです。もっと分かりやすい例はセクハラでしょう。セクハラという言葉がなかった頃、たとえば職場で男性上司が部下の女性の体に触れる行為は女性にとって不快だけれども、どうしようもないこと、我慢するしかないことだと思われていました。しかし、今セクハラという言葉の普及によって、それは明らかに「許されない行為」「犯罪」として認識されるようになりました。言葉が新しい「現実」を創造したのです。つまり、言葉は状態を識別しているのです。セクハラという言葉がなかった時代、私たちはそれを対象化して論じることができませんでした。それを一個の独立した行為として認識することができなかったのです。したがって、その是非を論じることでもできなかったのです。セクハラと名付けられたことによって、他の行為とは区別される一つの独立した行為として認識できるようになったのです。それまでは他のさまざまな行為の中に埋もれていて、それだけを取り出して論じることが難しかった行動ができるようになった。更に、この言葉を手掛かりにして、ある特定の行為がセクハラにあたるかどうかという議論ができるようになった。こうして、私たちはいま、セクハラとみなされる行為と、みなされない行為を区別するような現実世界に生きているのです。

つまりは、言葉が世界をつくっている側面があるのです。確かに「客観的な事実」としての世界はあるのですが、言葉によって、その客観的世界の認識は異なってくるのです。セクハラの事例がそうですが、疑いようがなく、動かしがたい現実も言葉が与えられることによって、認識が異なってくるのが起こるのです。

さて、14節を見ると、「言は肉となつて、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であつて、恵みと真理とに満ちていた」とあります。父の独り子としての栄光とあるように、神の独り子イエスとしての栄光が宿ったのです。「宿った」という言葉は、「天幕を張る」という意味の語です。言が肉となつて、私たちの間に天幕を張つたということです。私たちの間で天幕を張つたということは、イエスが私たち人間に連帯され、私たちが共にこの世の重荷を担われたということです。しかし、そのことはまた、私たちが主イエスの生に連帯せしめられ、主イエスと共に歩む者とされたことをも意味します。

神の意志の表れとしてこの世界が創造されたのですが、罪にまみれた私たち人間とこの世界を、主イエスは自ら十字架にかかることで赦しと救いへと招いてくださっていることを覚えて、主イエスと共に歩むことのできる幸いを感謝したいと思います。